

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

スマホで読める、感動のコラム!



両腕いっぱいのカネーション

前途に立ちほだかる未開の原野。その原野を切り拓かんと、立ち向かう心を燃やす開拓者。未だ経験したことのない...

続きはこちらから >>>



要(かなめ)は「教職員集団」

「非常事態になって、普段は気づかなかったことが見えてくる」とは、このコロナ禍ではしばしば耳にしている言葉です。...

続きはこちらから >>>



ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください!

<https://nikke-edu.org/>

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか? 子どもたちは「未来の宝」です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

多くの企業は経営を行うにあたり、経営理念や事業ミッションを掲げています。そこには、「こんな会社でありたい、社会にこのような価値を届けたい」という、社員みんなで成し遂げたい未来の姿が描かれています。それを実現するために、必要な仕組みや制度が導入され、社員が日々の行動で抛りどころとする行動規範が整えられています。行動規範というと難しく聞こえますが、「一人ひとりの力を合わせ、チームワークでより大きな成果を生み出す」というような基本的なことです。もし迷った時は、「家族や親友に胸を張って語れますか?」というような問いかけをして確認します。同様に、学校グランドデザインは、運営に関わる全員が共通して持つ「教育活動の全体構想」です。共通の考え方があって、それを実現するためのイベント・仕組があり、日々の一つ一つの行動があるのだと思います。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



2022 秋号 (年4回発行) No.11
2022年10月20日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町3丁目3-10
TEL: 06-6205-6665 <https://nikke-edu.org/>

特集

私がつくる子どもの笑顔 第7回

今、目の前の子どもたちに
してあげられるのは、今だけ

連載コラム 第3回

学校グランドデザイン

— 家庭と地域をつなぐ学校づくり —

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は、旭岳 (北海道上川郡) です

学校グランドデザイン

— 家庭と地域をつなぐ学校づくり —

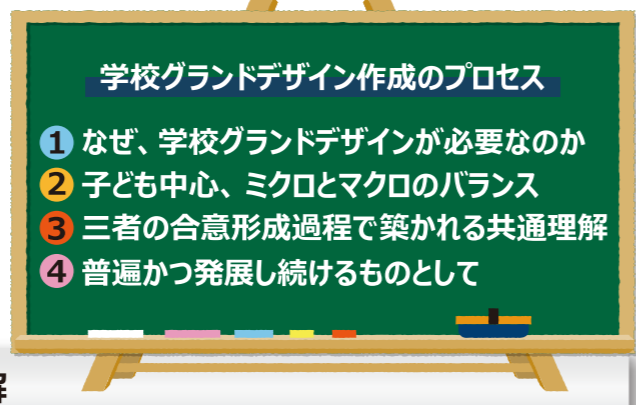


《ニッケ教育研究所顧問》 かつもと たかお 勝本 孝夫

元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

世の中では考えてもいなかった出来事が次々に起こり、私たちはさまざまな試練や困難に直面しています。予測が難しい時代ですが、だからこそ、いかなる状況にも微動だにしない学校づくりが重要となっているのではないのでしょうか。

そのときの一助となる学校グランドデザインについて、作成例を参考に4回にわたり掘り下げていきます。夏号掲載の②に続き、今回は③について述べていきます。



3 三者の合意形成課程で築かれる共通理解

企業経営や組織のあり方について語られるとき、しばしば「遠心力と求心力」という言葉を耳にします。「遠心力」とは、組織で言えば外部に目を向けてみるなど、外に向かおうとする力のことで、対して「求心力」とは、ぶれない考えや理念など、人を引きつける力のことで、組織が成長・発展するためには、この「遠心力」と「求心力」

の両方が重要とされています。学校づくりで考えると、知を求めて外部へ開いていく「遠心力」を発揮するために、学校・保護者・地域の三者の「心をひとつにする求心力」が重要と言えます。この「求心力」を発揮するためには、「三者の合意形成と共通理解」が必要不可欠になります。

“集合知”の時代

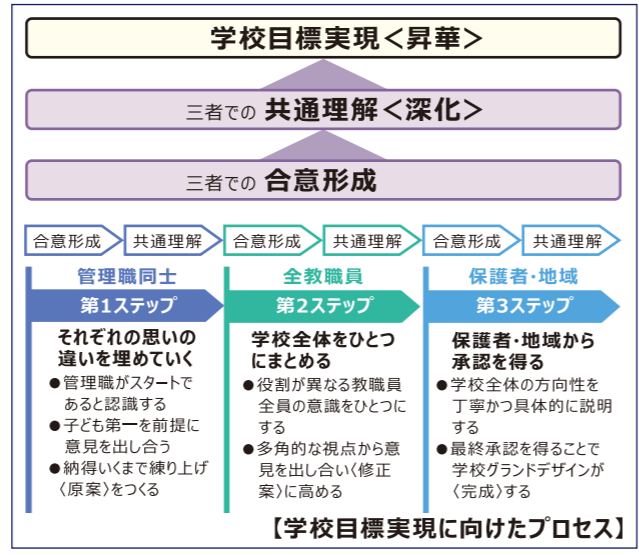
これまで誰も経験したことのない、混迷の度を増す今の時代は、“集合知”（集団的知性）によって切り拓いていく時代と言われています。“三人寄れば文殊の知恵”とあるように、多様な人々の経験や発想を活かし、知恵を出し合ってより良い方向性を導き出すことが求められています。一人の英知に頼るのでは、現代の難局を乗り越えていく上で最善の策とは言えないからです。ましてや、さまざまな

課題と向き合っている教育現場では、全教職員・保護者・地域の方々が意見を出し合って学校の進むべき方向を練り上げていくことが、どこよりも必要だと痛感します。そのことが、将来、予測不可能な状況を切り拓いていく子どもを育てることにつながっていくからです。学校グランドデザインを策定するにあたって、三者の心を一つにすることが非常に重要だと考えます。

合意形成を経て共通理解へ

では、心を一つにするためにはどうすれば良いのか。それは、「合意形成→共通理解→学校目標実現<昇華>→学校目標実現<昇華>」という段階を踏むことだと考えます。合意（コンセンサス）形成とは、多様な立場のさまざまな考えを、みんなが納得のいく形で一致させていく前向きな話し合いのことです。そして共通理解とは、みんなで練り上げた結果を共有し、互いの理解を深め合うことです。これらの段階を丁寧に、着実に進めていくことでみんなの心が一つになり、共に学校目標の実現に向けて歩んでいけるのです。すなわち、学校グランドデザインを学校づくりの“羅針盤”としていくためには、三者の「合意形成」「共通理解」という段階を踏むことが、有効かつ必要不可欠な方策だと言えます。

とりわけ、このプロセスのスタートとなる三者の合意形成はとても重要です。実は、この過程そのものに、すでに共通理解の萌芽があるのです。この認識がとても大切で、合意形成のための話し合いを重視することは、学校グランドデザインを策定する上での生命線になるのです。



合意形成の3ステップ

三者の合意形成には、さらに3つのステップがあります。

第1ステップ：管理職同士の話し合い

春号でも触れましたが、管理職同士の検討会を、三者での学校グランドデザイン共有に至るまでの重要なスタートに位置づけています。ここで練り上げた(原案)が、今後の学校運営の内実を左右するものとなるため、確固たる意思をぶれずに示す必要があります。例えば、子ども観・学校観・教育観と一口に言っても人によって微妙な違いがあります。それらが一致するまで、校長・副校長・教頭（通常は校長・教頭の2名）が心をひとつにして練り上げることが大切です。キーワードは、“スタートであるとの認識”です。

第2ステップ：全教職員の話し合い

第1ステップで練り上げられた(原案)を基に、全教職員が多角的な視点から意見を出し合っ(修正案)を高めていきます。教職員と一口に言っても、教諭、事務職員、給食調理員、管理作業員、教育支援員等、立場や役割はさまざまです。しかし、全教職員が“子どものため”

という同じ方向を向くことで、違いを乗り越え、個々の知見を活かした発想が生まれてきます。これこそが、「全教職員によるマネジメント体制」の確立であり、全員で学校をつくっていくということなのです。

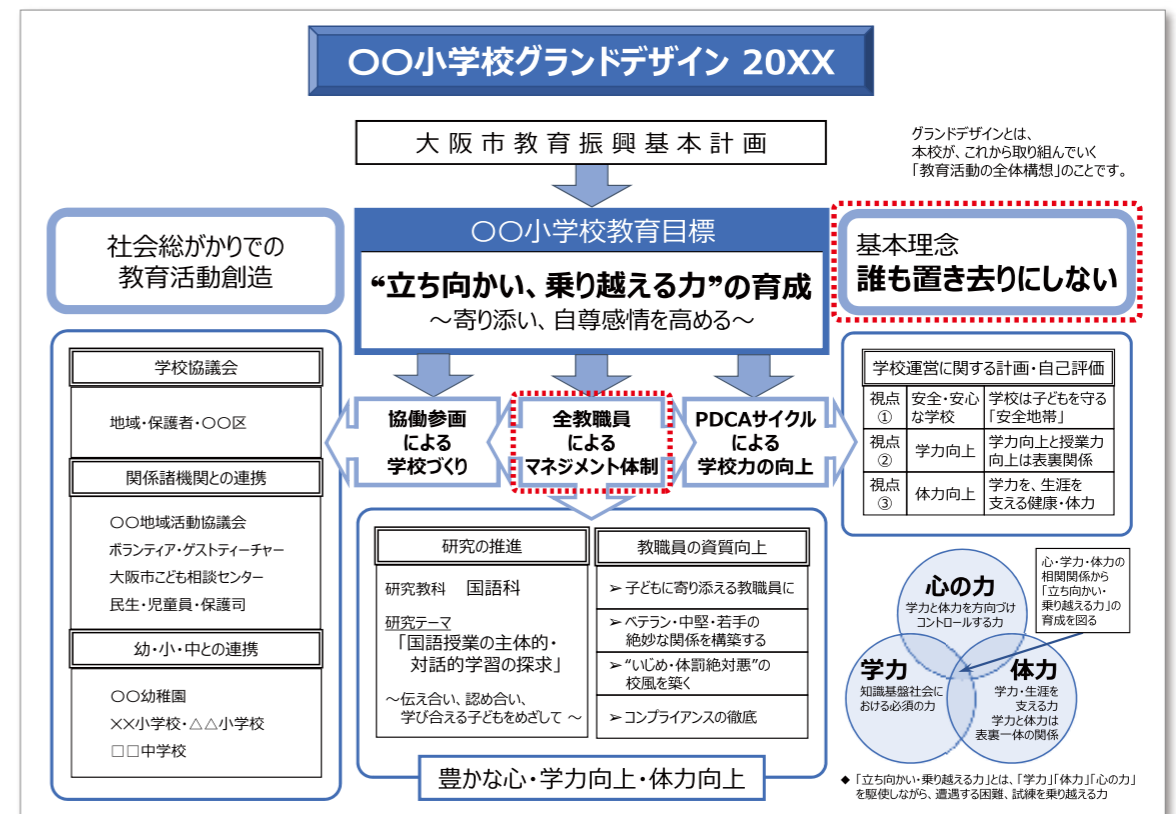
その状況をつくり出すためには、「個は全体の犠牲にはならず、全体の目標達成が個の目標達成につながる」という視座を、職員会議や週指導計画案（通称「週案」）へのコメント記述等を通して、浸透させることも大切です。キーワードは、“個と全体の絶妙なバランス”です。

第3ステップ：保護者・地域との話し合い

第2ステップで高められた(修正案)を学校として保護者・地域に提示し、丁寧かつ具体的に説明します。ここでの関わりの中から保護者・地域との共通理解が生まれ、協働参画による学校づくりが着実に進むことになります。最終的に保護者・地域からの承認を得ることで、初めて学校グランドデザインが(完成)します。キーワードは、“保護者・地域からの信頼と共感”です。

学校グランドデザインの作成例（大阪市）

※ 過去の作成例です／表中の点線は実際のものにはありません



基本理念がみんなの心をひとつにする

話し合いの場では、多様な考え方を如何に共通理解へとまとめ上げていくかが重要になってきます。学校グランドデザインの策定において、多角的な視点を活かしながら、最終的に一致した考えを導き出さなければなりません。そのとき、基本理念こそが共通理解へとまとめ上げる“中心軸”になります。

基本理念は関わるすべての人の心をひとつにし、場面や状況を貫くものとなるからです。学校グランドデザインの作成例にも掲げられている基本理念『誰も置き去りにしない』は、未来に生きる子どもを育成するための共通理解として、学校・保護者・地域の方々の心をひとつにするとの思いを強くしています。

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。
第7回は、大阪市立上福島小学校の當麻俊和校長です。

第7回 今、目の前の子どもたちに してあげられるのは、今だけ

《大阪市立上福島小学校》 當麻 俊和 校長

かつてお世話になった校長先生の言葉で、大切にしている言葉があります。「今、目の前の子どもたちにしてあげられるのは、今だけです」—— 何か取組を始めようとするとき、企画を立ち上げて実施するに至るまで、さまざまな段階を経る必要があります。それを考えると、一朝一夕にはスタートできないものです。そんなとき、先述の言葉を思い出します。「よし、今やろう！校長だからできることがある！」そう考え、「今、目の前の子どもたちにできることを今始める」、そのような子ども第一の学校づくりに挑戦しています。



「上福イメージキャラクター」の誕生

昨年度の児童会で、「上福（かみふく）のイメージキャラクターを作ろう」という発案があり、すぐに実施することになりました。何点もの応募作品の中から最終4点に絞られ、全校児童による投票の結果、学校のイメージキャラクターが決まりました。さらに、6年の児童が上手にキャラクターのぬいぐるみを作ってくれたので、私はそれをもとにイラストを描き起こしました。現在、ニックネームを選定中ですが、すでにシール等で活用しています。



児童が作ったぬいぐるみ



それをもとに描き起こしたイラスト

「上福漢字検定」の始まり

「校長先生、ぼく96点で銀賞をもらったよ！」
「そう、よくがんばったね！」
これは今年7月に実施した、第1回上福漢字検定の結果を返した後の、2年の児童との会話です。

大阪市立上福島小学校に校長として赴任し、今年で3年目になります。着任してからの2年間は、コロナ禍でのさまざまな制限がある中での学校運営となりました。3年目にしてようやくコロナが落ち着きを見せ始め、状況を見ながら遠足や校外学習、学習参観などの活動を再開できるようになりました。そのとき、学校運営のリスタートという思いが強くなり、校長として、何か前に進むための取組を始めたいという気持ちが高まりました。

そこで考えたのが、「上福漢字検定」です。一般的に知られている漢検（日本漢字能力検定）ではなく、学校独自に問題を作って実施する漢字検定です。80点以上の児童には「銅賞」、90点以上の児童には「銀賞」、そして見事100点満点の児童には「金賞」を認定し、校長より「認定証」を渡そうという試みです。それを年3回、各学期末に実施しようと計画しています。

すでに実施した第1回目では、209名中137名に認定証を渡すことができました。冒頭の児童の言葉にもあるように、認定証をもらった子どもたちはとても喜んでくれたようです。おそらく、努力したことが結果として出たという実感があつたからでしょう。今後は、惜しくも認定証をもらえなかった児童に再チャレンジの機会をつくっていききたいと思います。例えば、同じ問題での出題や問題数を減らすなど、児童の状況を加味しながら、もっとたくさんの児童に認定証を渡せるような工夫を考えているところです。



イラストのシールが貼られた
上福漢字検定の認定証

ほどよいハードル設定が、児童のやる気を喚起する

上福漢字検定では、各学期に学習する新出漢字を出題するようにしています。どの学年にも80字程度の新出漢字がありますが、それらを含めて100問程度の練習問題集を作成し、検定日の概ね1週間前に配付します。学習の進め方については各学級担任に委ねていますが、毎日継続的に練習時間をとる学級もあれば、各自に宿題として渡す学級もあります。その問題集の中から私自身が25問をピックアップし、上福漢字検定の問題を作成しています。ここで、ほどよいハードルを設定するように心掛けています。簡単すぎても達成感はありませんし、認定証に価値を感じなくなってしまいます。また、難しすぎてもやる気がなくなってしまいます。だいたい1日10問ずつ練習したら、自信を持って本番に臨めるというのがポイントだと考えています。この25問は、それまでに一度は漢字ドリルなどで練習している問題なので、振り返りと反復練習も兼ねることになります。従って、積極的に学習すればするほど結果につながるという流れになっています。

第1回目でも認定証をもらった児童は、達成感を得るとともに「次も」というやる気が湧いてきていると思います。また、今回は認定証をもらえなかった児童も、「次は頑張ってみよう」という意欲を持ってくれたものと、手応えを感じています



システム化でめざす継続実施

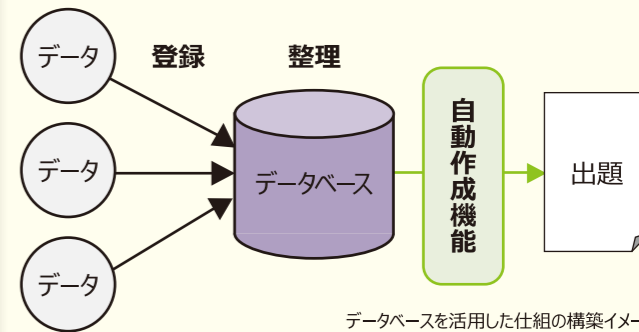
今年度から始めた「上福漢字検定」ですが、1年で終わらせてしまうとただのイベントとなってしまいます。学校として、これから継続していくことがとても大切だと考えています。そこで、担当者が替わってもスムーズに検定を行えるようシステム化を図る必要があると考え、次のような作業手順を作成しました。

●作業手順●

1. 新出漢字を含めたドリルのスキニング
2. 新出漢字のドリルのデータベース化
3. 練習問題の作成
4. 練習問題集の印刷・製本
5. 練習問題集の配付と各学級への取組依頼
6. 本番用漢字検定問題の作成
7. 上福漢字検定の実施
8. 回収・採点・データ入力
9. 認定証の作成
10. 返却

この作業手順に沿って実行していくためには、データベースを活用した仕組の構築が重要になります。練習問題・検定問題の自動作成機能を設けるなど検討すべきことが多くありますが、2年目以降の手間の大幅な削減につながります。これら仕組構築に係る作業が1年目で定着すれば、自ずと教職員の意識が高まり、印刷・製本・採点などといった役割分担もできてくるのではないかと考えています。

継続実施をめざしてさまざまな課題はあるかと思いますが、児童のやる気を喚起し、基礎学力を高めるために、今後も汗を流していきたいと心に期しています。



データベースを活用した仕組の構築イメージ

おわりに

「継続は力なり」という言葉があります。この「上福漢字検定」も何年続けられるかはまだ分かりませんが、できるだけ手順を簡略化し、全教職員が容易に理解して行動でき

るよう改善を図りながら進めていきます。これからも「今、できることを今始める」の思いで、子どもたちの笑顔のために、さまざまな課題に挑戦していきたいと思っています。